

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十二年六月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十七巻第二号（通巻第一九四号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第194号

6. 2010

詩  
語

品川 鈴子

詩語をメモ  
蜥蜴の岩の端に凭れ

万葉講座  
薔薇庭にまでパイプ椅子

俳席は  
三部屋の簀戸を開け放ち

添削指導  
建具はづして夏座敷



有馬 念仏寺

寺の沙羅こぼる障害手帳へも

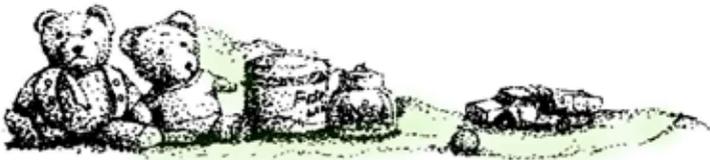
一絃琴はじく二の腕紹に透きて

がすれ虹慕ひて零る沙羅の花

沙羅散りて石の布袋が身じろげり

席入りにあたかも沙羅の花ぼとり

朝風呂に百の温泉玉と石罅玉



# 玉

# 鈴

# 吟

兵庫 佐方 敏明

ころころと笑ふ妻と子金蓮花  
青梅もぐ妻の成人記念の樹  
白木蓮ブランド店の並ぶ町  
石像の豚微笑みて長閑なり  
魚糶の素早き符丁水温む

東京 佐田 昭子

分校の土大股に卒業す  
紫荊手品師ハトを消して見せ  
春興やラフマニノフの鐘なれり  
葉大の門の回廊春の雨  
新入生乳母日傘の草食系

兵庫 塩出 眞一

比良八荒かもめ隠れに波尖る  
春の鴨見むと二千歩遠回り  
碇泊の客船かすめ燕来る  
ケーブルに腹さすられて摩耶笑ふ  
春の宵カルメンの声伸びやかに

大阪 島 純子

スキー校児らの黄色は弾けとぶ  
雪まだら千仞の谷をゴンドラで  
凍雪をアイゼン咬みて心地良し  
幾度の転居も共に豆雛  
雛あられ病臥の友に一つまみ

香川 島内 美佳

梅見むと鈍行列車の一人旅  
山茶花の垣名園へ誘ひぬ  
水温む讃岐の城に水手御門  
先々で声掛けらるる春始め  
老犬の顎を着けたる若草野

大阪 島本 知子

目隠しをされて雛は密室に  
またねーと児らは手を振り雛納め  
罪深き主婦熱湯に花菜入れ  
初桜母に写メール送信す  
万物がすつきり見えて四月来る

愛媛 鈴木てるみ

制服のおさがり届く春休み  
春の虹願ひを告げぬまに消ゆる  
学年末指冷やさるる保健室  
あどけなき恋の終りや卒業日  
ありさうな結末となる春の夢

大阪 鈴木 浩子

露の臺ポンプに溢る弘法水  
みささぎに嘯りの楽畝傍山  
脹れ面つひに鱻の尖り口  
ランドセル並ぶ工房春を待つ  
永き日を寺の縁起の京訛

香川 陶山 泰子

戒名に紅の字のあり落椿  
大名の墓所に誘う鳥の恋  
春疾風洗濯物を追いかける  
クレヨンで壁に落書き春の色  
閉園と共に現わる恋の猫

岡山 瀬口ゆみ子

古墳へと梅の瑞枝をくぐりけり  
草萌ゆる髪多きこと称へられ  
ハミングを聞かせる春の電話口  
連山の峰くつきりと卒業日  
愛敬の禿頭なる雛子雛

兵庫 高橋 大三

梅日和「シノサカ行<sup>カ</sup>」と外国人  
梅が枝に揺るる短冊読み巡る  
梅林に話の弾む同年輩  
府立高より千本の城の梅  
園丁憩ふ梅園のそこ立入れず

愛媛 武司 琴子

梅が香に猫幾度も背伸びして  
喪歸りの瀬戸の潮騒春寒し  
沈黙を解す術なし春の通夜  
梅香る宮に祈願の絵馬多し  
延延と勝負の尽きぬ春将棋

大阪 竹下 昭子

普陀落へ向きを変えたる雛の舟  
タンカーのたてる波越ゆ流し雛  
洋館の栄華とどめて冴返る  
戦前も戦後も知らずミモザ咲く  
倫敦と楽譜に記す春館

愛媛 武智 恭子

頭垂れ水仙の花終りゆく  
梅に来て花びら散らす鳥の群  
木々多く初音に耳を傾ける  
白椿病後の吾をば癒しけり  
手造りの雛飾りたる美容院

# 薬草歳時記

(一九三)ムクロジ(無患子・木樨子・木患子)

菅原 由紀

無患子の<sup>みせん</sup>弥山嵐に吹きさわぐ

阿波野青畝

深大寺の山門をくぐって境内に入る。本堂に向かつて右側に一本の大きな木がある。様々な木のある深大寺だが、ひととき大きい。その大木がムクロジだった。「ムクロジ」と記した木の札がかけてあり、実はお正月の羽根突きうねつきの羽根の球に利用すると。

松本清張の小説「波の塔」のはじめに、深大寺附近として深大寺の情景が描かれている。湧き水の多い場所に武蔵野の樹木―ケヤキ、モミジ、カシ等が多いと書かれているが、残念なことにムクロジについては書かれていない。

本州中部以西、四国、九州、沖縄に分布。割合暖地の山林に自生、また社寺の境内などにも多い。古くは人家に栽培され、落葉高木で17〜18メートルの高さになる。

6月下旬に枝先に小さな淡緑色の小花が咲く。

葉は羽状複葉で互生し、5から8枚の広い披針形の小葉を持つている。固くてやや光沢がある。

果実は直径2センチ位の球形で、秋には成熟して黄色、黄褐色になる。内側に黒い固い種子を生じる。

薬用部分は果実で、延命皮という。秋に採取し種子を除いた果皮を陰干しして乾燥させる。

延命皮にはクロムジサポニンを含み、強壯、止血、去たん薬として使用。

葉はフラボノイドのアゼゲニン、ケンフェノール、ルチンを含む。

実は多量のサポニンを含み、泡立ちがよく汚れをよく落とすことから、江戸時代まで庶民の生活にすっかり根づいていた。洗剤の代用として、洗髪、洗濯、また書画の汚れ落としにも使用したとか。

ムクロジの泡は燃えにくく、空気も遮断したので、泡消火器の中にもつめられていた。

大きな樹木の果実の中の黒い固い種子が、正月の羽根突きの羽根の球にずっと使われていた。その固い黒い球が羽子板とぶつかって、ポーン、ポーンと軽やかな音がする。かつてはどこでも見られたお正月の風景、お正月の音だった。なつかしい光景の一つである。

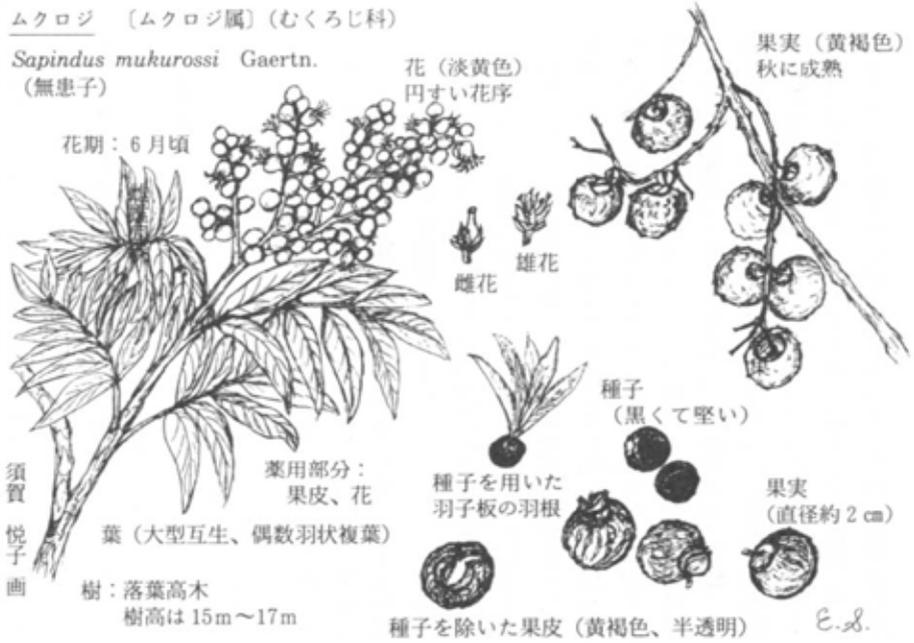
参考文献 原色牧野和漢薬草大図鑑(北隆館)

山溪フィールドブックス薬草(山と溪谷社)

著者略歴 神戸薬科大学卒、薬剤師

ムクロジ (ムクロジ属) (むくろじ科)

*Sapindus mukurossi* Gaertn.  
(無患子)



むくろじをかちと無患子落し込む	響き落つ無患子の音深大寺	無患子の降る寺を高所に明日香村	無患子の降る伊賀の空晴れがたき	無患子のしぐれし空にみなぎる実	無患子のみどりさわなり樹上樹下	無患子の雨に音たつ神輿庫	むくろじの青き実を踏む聲	むくろじを遠照らす灯の源いづこ
* 細野 恵久	* 片野 光子	松崎鉄之介	飴山 實	皆吉 爽雨	石塚 友二	桂 樟蹊子	大橋越央子	下村 槐太

(\* むくろじ)

# 鈴の奏

品川鈴子選

風船につづく雑踏ぬけきれず  
兵庫 磯田せい子

産院に波打つごとく桜草  
桃の花外来診に小半日

穏やかに下校のチャイム花えんどう

但馬から叔父が露味噌だけをさげ  
兵庫 井上加世子

ビル谷間蒲公英伸びる車止め

雛あられチヨコレート味を取り含いに

鉛筆を持って寝る子に春日差し  
大阪 吉田 和子

水輪より三段飛びの春の魚

朝な朝なけいこ重ねて雁帰る

春浅き京に右翼の街宣車

卒園式指図する子もされる子も

群れ咲けば忘勿草の名を忘る  
兵庫 和賀 俊子

ポケットに二枚の切符春夕

傘閉じて春愁の街かけぬける

風が風呼んでミモザの丘さわぐ

紅梅の風に押しゆくベビーカー  
大阪 宮村フトミ

浪花場所街に雪駄と赤い靴  
ホームステイ日の丸画いて揚げる風  
噓して一斉に発つ庭雀

早暁の鳴ける鶯遠慮がち  
福井 木曾 鈴子

時代雛役場のロビー人目引く

彼岸桜楚楚と揺れたり浜の風

医を学ぶ子のにこやかに進級す  
大阪 北川 光子

ワンルーム声を密めて福は内

寒禽の羽色に見入り忍び足

一徹も素直になりし春の風邪

八卦見がヌードル啜る春日和  
演歌派も軍歌派も居る花見莫塵  
兵庫 上田 雪夫

鳥帰る郵便ポスト撤去中

二代目の住職に嫁松の花

ドーナツの中はまん丸桃の花

春の霧硫黄とまざる雲仙路  
兵庫 西躰いと

日田の雛古きを誇るにごり酒

秀

鈴

記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 角谷 美恵子 //

\*選句は全て 品川鈴子

桃の花外来診に小半日

磯田せい子

総合病院では外来の診察をうけるのにも、ほぼ半日はかかってしまう。それを承知でいらせざに待てば、窓口には桃の花が活けてあり、庭でも桃が花盛り。しかも通院で治る身だから、救急の大手術や不治の患いに較べれば、しみじみ幸運と感じる春。おっとり構えて病氣と優雅に付き合うのもすぐれた治療法。

鉛筆を持って寝る子に春日差し

井上加世子

窓から差し込む麗かな陽射しを受けて、勉強中の学童がつい居眠りしている。見れば小さな手には鉛筆を握り締めたまま、夢うつつの裡に算数や漢字の書き取りを気持ちよくしている様子。勉強の好きな子を柔らかな春日が暖かく包み育む微笑ましいひとこま。

水輪より三段飛びの春の魚

吉田 和子

静かに温む水面を眺めていると、ふいに水輪を生んで勢い良く飛び跳ねた魚は春の息吹が溢れ、余勢を借りてウルトラ三段飛びの妙技を披露して、素早く水へと潜った。瞬くまの美しい魚身の撓りが臉に残り、さながら水の精かと思つ

群れ咲けば勿忘草の名を忘る 和賀 俊子

保護されたカタクリの群生地からの帰り路、山里に群れ咲いている勿忘草を見つけ、その余りに優しい色形可憐さにこんな花だったのかと驚いた記憶がある。藍色の小花をいっばいつけていた。「勿忘草を貴方にあなたに」という歌も思い出される。

噓して一斉に発つ庭雀

宮村フトミ

野生の生き物は聴覚が研ぎ澄まされていて、僅かな音にも鋭く反応する。毎日庭に来る雀でさえ用心深く、ガラ又越しに目で雀を追っている私が少し動いても飛び立つ。昔漸に出てくるお爺さんのように、雀のお宿に連れて行つ

てくれる日は何時のことでしょうか、意地悪ばあさんが貰った葛籠だけは御免蒙ります。

医を学ぶ子のにこやかに進級す

木曾 鈴子

進級おめでとうございます。春爛漫のこの季節、幸せのおすそ分けに預かった気分ではこほこしてきます。晩学の俳句連句も、目標に向かって一歩一歩努力していると結果は付いてくると信じて。

ワンルーム声を密めて福は内

北川 光子

年に一度だけ買う福豆を年々おいしいと感じ、その頃になると忘れないうちに早めに準備する。昔は玄関も裏口も開け放ち家長が大声で「鬼は外、福は内」と豆を撒いたものです。時には子どものために殻付きピーナッツや飴も。昨今はワンルームどころか一戸建てでさえ大きな声を聞かなくなつた。寝る頃になつてやっとと思い出し、小さな声での豆撒きは我が家だけでしようか。

演歌派も軍歌派も居る花見莫塵

上田 雪夫

いつまでも寒さが厳しく桜の蕾は固く、開花は何時のことやらと思つていても開花予想の出る頃になると今年は何処へ行こうかと思いを巡らせる。京都府は八幡市の背割り桜は桂川宇治川木津川が合流して淀川と名前が変わる一、四キロメートルの堤防にそれは見事に咲き誇ります。花の下をそぞろ歩くのも良し、花見弁当に酒があれば歌のひとつも歌いたくなる。さて来年は何処へ行きますでしょうか。

春の霧硫黄とまざる雲仙路

西駆いと

なんと幻想的な風景でしょうか。ゴツゴツとした岩肌。視界は霧と噴煙に閉ざされたうえに硫黄の白濁して卵の腐つたような臭気。柵がなければ迷い込んでしまいそうな路。福岡県在住の芥川作家村田喜代子「硫黄谷心中」を思い出す。

母喋る語り部のごと雛の間

池田 久恵

昔は童話を読んできた母が、白酒や菱餅の雛飾りの前でほうじ茶の入った湯のみを手に、お雛様を買った頃はね、初めて歩いた時はね、ぼつりぼつり遠い記憶を辿ります。時の流れが止まったような、まったりとした親子の幸せな時間。